

Q1. 発表内容について教えてください。

この研究では、ビデオ喉頭鏡の画面に声門がまだ映っていないときに、「声門がどちらにあるか」を予測する AI を開発しました。軽量の AI でも、比較的高い精度とリアルタイムでの処理速度が得られました。将来、画面上に進む方向を矢印で表示できれば、気管挿管の安全性向上や若手医師の教育に役立つと考えています。

Q2. 研究テーマの着想から今回の受賞までの軌跡を教えてください。

のどの奥を観察する際、声門が見えてからではなく「見つけるまでの操作を支援できないか」と考えたことが出発点です。40 症例の動画から 7,000 枚近いの画像を抽出して麻酔科医 4 名に協力してもらってデータを作り、複数の AI を学習させて精度と速度を比較しました。そのデータと精度が学会で評価いただけたんだと思います。

Q3. 質の高い基礎研究と臨床研究を両立する秘訣はありますか。

文献を読むだけでなく、日々の臨床で感じた「なぜ」や「もっと安全にできないか」を研究につなげることを意識しています。また、一人ですべてを行うのではなく、それぞれの分野を得意とする先生と協力することも大切だと思います。札幌医科大学麻酔科には、さまざまな研究に挑戦し、相談できる環境があります。

Q4. 臨床、研究、私生活の両立はどのようにされていますか。

章立てをするように、臨床、研究、家庭の時間を分け、短時間でも少しずつ進めるようにしています。常に完璧な両立は難しいですが、周囲の先生方や家族の協力で支えられています。当科は、臨床を大切にしながら、希望に応じて研究にも取り組める環境だと思います。

Q5. 今後の目標や後進へのメッセージをお願いします。

もちろん、今回の研究はまだ完成ではありません。今後は症例数を増やし、実際の気管挿管での有用性や安全性を検証し臨床で使用できるシステムを目指します。

AI 研究も、最初から特別な技術が必要なわけではありません。日常診療で感じた小さな疑問を言葉にして、周囲に相談することが研究の第一歩だと思います。

Innovation は、日常診療の小さな疑問から始まります。研究に少しでも興味があれば、ぜひ一緒に取り組んでいただければと思います。

笑いながら研究の話ができる仲間が増えれば嬉しいです。